

それであるから竹の伐採には注意して、竹林がまばらにならないやうにしなければならぬ。粗らかな時はまた風に竹竿が動揺して、根や莖を弛めて母竹の發育を害する。

五、伐採の法と其季節

苦竹を炭線用として伐り出すのは、發生後五年若しくは七年を経過したもので、周圍六寸乃至八寸位のものが宜いのである。尙ほ一本の竹に就て言へば、根本四尺以上から十二節即ち一丈五尺くらゐまでのものが適當であるのだから、それ以上のものは着けて置く必要がない。但し普通の竹材にあつては四年以上のものであること、他の竹類とかはりはない。

竹を伐る時期は秋冬の交であつて、即ち十月から一月頃までを最も可しとする、伐採したならば直ぐ枝を拂はず、二三日その儘にして置いて、二晝夜以上経つてから枝を拂ひ、かうすると竹竿は蠹害にかゝることがない。然し此の時期の間は伐採する時

は、その切株が永く腐朽しないから筍發生に利益がない。故にその切株は斧で割つて腐敗を促すのである。

若しまた筍發生前に竹を伐採する時は、その切株は早く腐朽して筍は盛んに發育する。が、其の時に伐採した竹竿は蠹害にかゝるから不利益である、伐採はやはり十月から一月頃までが好い。

次に其の伐採には斧を以て伐り、決して鋸を用ひてはならぬ、已むを得ず鋸を用ゆる時は、その切株を斧で割つて其根の腐朽を促すやうにするのである。また竹の枝は梢に向けて鎌にて拂ひ、逆には決して拂ふものでない、然うすると自然竹竿の皮を削いて、竹竿を腐敗させることになる。

そのやうにして伐採したものは、舊くから一定した次のやうな方法を以て結束した上、販賣または貯藏するのである。

周圍一尺 一本 束

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九寸	八寸	七寸	六寸	五寸	四寸	三寸	二寸	一寸	二寸以上
二本	三本	四本	六本	十本	十六本	三十二本	三十二本	三十二本	二寸以上
東	東	東	東	東	東	東	東	東	東

六 孟宗竹の栽培と籐の採收

孟宗竹の培養法は苦竹、淡竹と少しの相違もない。が、多少異つた所もあるから、その異つた點だけ云へば、苦竹、淡竹は稍瘠悪な土地に仕立ててもいいが、孟宗竹に至

つては成るべく肥沃の土地を選ばないと、孟宗が細くなるうれひがある。筍の生長した後その梢頭を切斷するのは、前に説いた通りで、それは孟宗栽培上の必要條件である。それから地下に藁若しくは下草を敷いて地を温める事などの注意が必要である。その次は籐のことであるが、籐は我國では人間の生存上必要な用途を持つてゐるもので、日常の用途にて工藝品にも使用せらるゝから、竹林經營者は是非それが採收を求め、地上より生ずる生産物を敗棄して了ふやうなことをしてはならぬ。籐の良品は苦竹の皮で、白皮竹のものは特に高價であるが、今苦竹林の良品と云へば一反歩平均採收十二貫目として、三圓位の副収入があるのである。故に竹林栽培家はつとめて籐の剝離する頃拾集することが大事で、其の時は雨の降らぬ前に拾ひ集めて、晴天の時に一枚毎に並べて天日に乾かし、表裏より乾かした上に一束にして貯蔵するので、雨に當ると腐敗し、または色が褪めるから注意しなければならぬ。此の籐を精製した上等のもの、相場は一貫目五六十錢位で大きい形のもの程價値がいゝのであるから、一枚

と雖もおろそかにせぬやうにして、一錢でも収益を多くしなければならぬ。
 笹は幹の分ばかりでなく、枝葉のものも性が繊弱なだけ精製されて、諸種の工藝品
 に用ひられるから、つとめて拾ひ集めるやうにしなければならぬ。工藝品にして使用
 する外、淡竹の笹は火薬の炭になる。孟宗竹の皮は、幹枝ともに其の性が硬いから、
 その需用は苦竹以下に居るのである。

此所に竹林一年の収益を擧げる。

上等の竹林 (目通六寸以上)	一反歩の収益	金五拾圓
中等の竹林 (目通六寸以下)	同	金三拾圓
下等の竹林 (目通五寸以下)	同	金拾圓

苦竹栽培年中行事 (孟宗林もこれに倣ふ)

一月の行事

- 林内に防寒の稻藁を敷く。
- 寒國では雪が降り積る時その雪を拂ひ落とす。
- 垣根を修繕する。
- 竹林の伐り残りを伐る。

二月の行事

- 本月は苦竹林淡竹林の伐採を終る。
- 此の月淡竹林苦竹林に肥料を施しまた盛土を行ふ。
- 竹の葉枯病が生ずる頃となるからよく注意する。
- 伐竹量及び賣上金高を帳簿に記して計算して置く。
- 伐採竹の枝は垣根用または、燃物用に貯蓄する。
- 東京では寒肥を此の月にする。

三月の行事

- 此の月中孟宗竹、龜甲竹の移植を行ふ。(地下莖埋付は來月の上旬までよし)
- 黒竹、淡竹類の地下莖を移植する。
- 竹林の周圍に保護樹を植ゑる。

四月の行事

- 此の月末淡竹の地下莖を埋付ける、五月初めまでよし。
- 母竹を立て竹の皮を拾ひ不良な筍を採る。
- 筍の掘跡へ肥料を施す。
- 自然枯の發生したるものがあれば驅除することを怠らぬやうにする。(天狗巢病も同じ)
- 苦竹林の下草をとる。

五月の行事

- 此月中苦竹の移植を行ふ。(地下莖は此月末から六月初めまでよし)

- 苦竹の鞭根を移植する。
- 淡竹、黒竹のトマリコを除く。
- 淡竹林、黒竹林は籜の拾集と乾燥を怠らぬこと。
- 淡竹林の立竹を定め其餘の筍を取る。

六月の行事

- 入梅中は雨降の内苗竹を移植する。
- 苦竹林は立竹の密度を調査し尙ほ虫害の有無を調べる。
- 鳳凰竹、寒竹。四方竹などの挿植法を行ふ。
- 獸害を除く。

- 淡竹林に開花するものがあれば成るべく全部伐り取りて了ふ。
- 苦竹、淡竹、黒竹などの新植には、梅雨後葉を敷いて土地の乾燥を防ぐ。

七月の行事

○この頃は苦竹の筴がよく発生する頃存トマリ筴の巡視をよく行ふ。

○七、八、九月頃は強風のある頃故風折のなきやう注意し折れたものがあれば伐り拂ふ。

○籜の貯藏。

八月の行事

- 苦竹の発生年號を記入する。
- 新植地の発生経過を視る。
- 夜間夜盗蟲の驅除を行ふ。
- 雑草の繁殖時期故その除草を務める。
- 伐竹器具の整理。

九月の行事

- 苗竹の株植を行ひ、十月の末まで宜し。

- 除草を終る。
- 堆肥の製造。
- 京都地方では此月より十二月まで寒肥を與へる。
- 本月末より伐採を始む。

十月の行事

- 引續き伐採の仕事、竹は大きさによりて區分し束を作る。
- 母竹の移植
- 孟宗林に肥料を施す。
- 筴促成の爲め馬糞を林内に敷く。

十一月の行事

- 新植地の施肥及び從來の竹林の施肥。
- 伐採は引き續き行ふ。

○寒い地方では林内に稻稈を敷く。

十二月の行事

○年始用の竹を伐り出す。

○促成せしめた筍を掘出す。

既に趣味實益の二方面に對する談話を終つたから今度は著者の眞面目な立場にかへつて少し竹に對する觀察を述べることにしやう。

第三 觀察篇

一、彎曲せる竹の盆栽を廢すべし

予は既に竹笹の培養及び手法に就て詳細記したつたつもりであるが、而も尙ほ記すべきの記事がないではない。其等を今少し觀察篇と題して此所に記して、本篇の補遺とするが、予が先づ此所で大に言ひたいのは、「彎曲せる竹の盆栽を廢すべし」といふ事である。

今、東京市中で見上から云ふが、東京の銀座の如き大建築の家屋の續いた所には、事務所のやうな所、料理店のやうな所、喫茶店のやうな所には、よく竹の盆栽を飾つて置くが、其の竹たる、聊か普通のものとは違つて、其の種類は孟宗竹であるが、高さは五尺位で、そして多く一本立で、其の幹は、松、杉のやうな樹木の盆栽の通りに、

「こんな格構に彎曲してゐることである。」

此の彎曲せる竹の盆栽を作るのは、勿論普通の植木屋で、高尚な趣味も、自然的の觀察もないものであるから、無理も無いことであるが、予から言はすれば、

彎曲せる竹は、自然の形態に反し、竹の性質に反するものである

といふ事を斷定する、本篇の上に於ても、屢々言ひし如く、竹の性質なるものは、形態の瀟洒にして、其の幹の圓直なる事

にあるのだ。其の幹の圓直なる竹を特更彎曲して、樹木の如くするのは、謂までもなく、竹本來の性質に背反してゐるので、勿論これは、

奇形の竹、變態の竹、片曲の竹

で、自然上の風致を縮寫した盆栽として愛すべき性質のものではない。

故に予は此の彎曲せる竹の盆栽を廢止することを奨めるのだが、高尚な思想のない植木屋に向つて、これを奨めるのは、事が難澁になるから、それは竹を愛玩するもの

の上から改めて行かなければならないである。

斯様に背自然の竹を好むか、愛すか知らないが、兎に角、出來損ねの竹、片曲の竹を愛して、其の店先などに並べて置くやうでは、竹を飾つて置く者の趣味も、憚り乍ら低劣な程度にあると云つても、一言も無いやうである。故に予輩は、その彎曲せる竹の盆栽を廢するの手段として、竹の盆栽を飾るもの、頭からして改造したいと思ふのだ、それは漸次趣味の普及を俟つとして、差し當り、何人と雖も此の彎曲せる竹の盆栽は一切使用し、愛玩しないやうにすれば、自然と其の物は失くなつて了ふであらうと思ふ。それが彎曲せる竹の盆栽を廢する第一の手段であるやうである。其の形態の大なるものを、微小なものに收縮するのは、大觀した自然界の有様から見れば、皆自然の事であるには相違ないが、大を小にしても尙ほ其の形態を失はなければ、一個の美術なるを得るけれども、直き性質のものを曲げ、曲がる形態のものを直くすると、より以上の不自然になつて、より以上の非美術になるのは、物の道理の我等に既に教

ふる所である。

言ふまでもなく竹は直きを以て性と、曲れるを以て不性とするので、其の彎曲せざる以上は、竹の小自然を一個の盆栽中に收められないと言はゞそれまでであるけれども、既に小なる形態のまゝ、これを鉢の盆栽と爲し得る以上は、より以上不便と、悪形とを爲して、それをより以上の不自然に近づくる必要はないのである。彎曲せる竹の盆栽は、速かに廢するに如くはないのである。

二、竹を愛する趣味を養へ

今日の盆栽を愛するもの、庭を作るもの、植木を楽しむものは、松、杉、檜、楓、石榴、華欄の如きものを愛して、一向竹には目も呉れない。「何んだ竹なんだ」といふやうな考へで一概に貶しつけて了ふ。竹の虐待さるゝことは豫想以上で、庭などに少しでも篁の類が出ると、讐敵のやうにして之れを掘取つて捨て了ふ。こは一般の風習で、

竹篁の類を盆栽に庭園に應用しやうといふものは至つて少いのである。

これが若し助長して、竹篁の類は一切庭園や盆栽に用ゐぬことになつたならば何うであらう。世界に誇るべき日本の植物は、其の跡を絶つと共に、英米の諸國から逆しまに其の苗を取寄せなくてはならず、植物分布上の偉觀は、不幸ながら彼地に移つて了ふやうになるであらうと思ふけれども、予輩は今日國民福論の上から、竹の嗜好を増さなければならぬといふ議論を立てるのではなくて、日本人の趣味性から、尙ほ竹に對する趣味性を増せといふのである。と云ふてまた竹篁の類は、凡ての盆栽植木に優つてゐるから、他を廢して之れを用ゐよといふのではない。此の愛玩心を最う少し向上させたいと云ふに過ぎない。

尤も實際上、竹の異つた種類、例へば唐竹、カシロ竹、布袋竹、龜甲竹、業平竹、永年竹、寒竹、金明竹、黒竹などいふものに至つては分布上極めて少く、彼の松の如き、杉の如き、檜の如き野生、實生の類は絶無と云つても好い位であるから、經濟的

の關係なくしてそれを培養繁殖させる事、前の松、杉の如き通りにはならないから、可し夫れを愛玩しやうと思つても、充分に出来ないといふ不便さはある。然し一般に竹の種類を愛すること今日の上に出でたならば、漸次その量も増加して、容易く欲するものを手に入れるといふことが出来て来るであらうと思ふ。斯様な不便な状態になつたのも、畢竟するに竹を愛することを凡ての盆栽家が忘れて了つたからで、之れは將來何うしても改めなければならぬことと思ふ。固に云ふが、日本に産する竹の種類は凡て、五十有餘種あつて、これが日本の此所彼所に散在してゐるのである。

三、地方竹の移植研究

竹の種類は日本全國に五十有餘種ある。それが氣候と地味の異なつた所に生じてゐるのだから、其の移植に就ても多少の手心が入るのは勿論である。前篇には書かなかつた南部表の原料になる白竹の移植の如きは此の好い適例で、白竹の移植に關しては、

竹林博士なる美濃の坪井伊助翁が談話の中に、

苦心の末、白竹の本場は九州の山奥、八女郡星野村地方(筑後國、福岡縣に屬す)であるといふことが分つたから、態々同所まで出かけ、竹の根分を頼んで、枯らさぬやうに確かり荷造して、遙々自家の試植林まで持つて歸つた。斯くして段々栽培試験を行つて見ると、五六年間は地出來の苦竹よりは白琉の少い籜が採れたが、年を経るに隨つてそろ／＼斑が入つて来る。幾度種竹を取寄せても同じ結果を生ずる。其所で始めて「これは苦竹の變性種であつて、地質の關係が大なるものである」といふことが分つた。十六七年の長日月間に幾度の費用を投じて研究した結果は唯此の結論を得るに過ぎなかつた。

といふのでも分るであらう。

此所で少し坪井翁と白竹との事を記して置くが、坪井翁は、岐阜縣美濃國揖斐郡本郷村(大垣驛より三里許りの處)で、日本式の家庭を建て、日本式の庭園を設け、樹蔭

又は飛石の間に介在して、風致的竹類を植込んで、竹に對する趣味を楽しんで居る人であるが、其の庭園には二十餘年間の苦心になる、日本内地の各所に生ずる竹が、風致的にさまざまの美觀を爲してゐるので、竹を研究する植物學者は勿論、園藝家、林業家などは日本人でも、外國の人でも一度は必ず訪問するといふ竹通なのである。

其の様な竹通がいふのであるから、白竹の如きは全く移植に適さないと同時に、竹の移植が容易でないといふことが知れるであらう。然らば地方に於ける特種の竹を持て来て、これを盆栽になり、庭園になり仕立るといふことに就ては、全く不可能であるかといふに、今日にては植物本來の性質なり、地相の關係なりを、學問的に研究することが充分に出来るのであるから、それを爲したうへに、移植に務めたならば、外國の植物が優に我國に移し植ゑらるゝことも出来る例もあるのだから、絶対に不可能であるといふことは言へないのである。斯る方面の研究は、松の如き、梅の如きものに絶対にないことで、其の多趣多様にして趣味の多きことは、獨り竹にのみ存すること

で、而して園藝上の面白味が澤山にあるのである。

四、竹の變種研究

松、梅の如きは實播も出來、挿木も出來、採木も出來、接木も出來るけれども、竹に至ては、是等の繁殖法は絶対に出來ないのである。

草花の類は、人工媒助法に依て、新種を作ることが出来るが、樹木にはそれが出來ない。唯外國で「キメラ」と稱する接木法に依て、一種の變種を作ることが出来るが、是等の方法を絶対に行へぬのは竹である。竹は幾度もいふ通り、母竹に依て移植繁茂させる許りであるから、日本全國の孟宗竹は、皆同一根本から諸方に分布されたものであるといふことが出來、それが一方には九州にあり。一方には盛岡、秋田の東北地方にあるとも、其の母竹はまた同一種屬、また同一系統から出てゐるものと云つて宜いのである。

然らば竹の變種、例へば孟宗竹と苦竹との間の子とも稱すべきものは、全然作ることが出来ず、それを作らうとするのは全く狂人の所爲としか思へぬが、而も地方に於ける竹の種類の異なつてゐるものは、矢張幾分の變種性を帯びてゐるもので、氣候風土の關係如何に依て、斯くの如きものになつたものもあらうから、同じ苦竹でも、培養の如何に依ては、一種の變質性のものを作るといふことは、絶対に爲し能はぬことでもなかうと思ふ。

前に説いた白竹の如きは、實に苦竹の變種したものであつて、坪井翁の言ふが如くんば、現在の繁殖區域以外絶對に移植することが出来ないやうで、出来ても普通の苦竹と選ふ所がないやうに成つて了ふのであるから、之れを逆にして、普通の苦竹でも、培養の如何に依ては、其の地方に從來無かつた、一種の變成竹を其の地に生せしむることが出来るかも知れないのである。此等竹の變種研究は、竹の移植研究と共に、將來學問ある園藝家の爲すべき事業である。現に前の坪井翁の如きは、坪井竹なる一

新種を持つてゐる位で、これは風致上の栽竹として、翁の庭園に生じてゐるが、其れは決して苦竹、淡竹の如き普通のものではないのである。

五、黒竹と白竹との區別

黒竹は重に風致上の竹類として人に愛玩せられるが、白竹は所謂南部表の原料として、其の製造者に重用せらるゝのである。黒竹は枝幹大ならず、幹色自然に黒きが故に、何人でも一見して分明するが、白竹に至つては、外觀苦竹と異なることが無いから、これを識別することは、極めて困難である。然し今其の異なる點を擧ぐると、

- 一、節高さ事。
- 二、節間距離短き事。
- 三、幹肉稍厚き事。
- 四、筍の時代、籜の斑紋(俗に星といふ)圓形を爲し、苦竹は長く流る。

五、脱皮後は籜は斑紋少く、著しく白色を帯ぶ。

而して白竹の我國に生ずる區域は、極めて少く、秋田地方では男鹿半島、愛知縣では東春日井郡の一部、熊本縣では菊池郡鹿本地方、鹿兒島縣の一部及び臺灣の一部であるが、その本場は前にいふ福岡縣の八女郡星野村外數村及び、浮羽郡の姫治村などである。

筑越國に生ずる白竹の籜が、何故に南部表になつたかといふに、事の序に書いて見やうなれば、徳川藩政時代に、産地支配藩たる久留米藩が、南部藩と親戚の關係上、物品の贈與を爲すに方り、此の籜を包物として送つたのに起因するといふことで、表の製作は主として在江戸の南部藩下屋敷足輕の手内職として行はれたので、籜は筑後の産でもそれを南部表と稱したので、今日でも筑後は籜の生産地だけで、表の製造は出來ず、表の製造は東京及び大阪の職人が行つてゐるのである。

故に白竹を林業式の培養と爲すには、それから非常な研究と經驗とを積まなくては

ならぬ上に、東京を基礎とした地方の園藝家は營業上に大なる支障を來すから、然うした栽培はまづ絶望であるけれども、其の繁殖力比較的強く、且つ病虫害に對する抵抗力も割合に強く、彼の淡竹並に苦竹に發生する自然枯病、若しくは蔓自然枯病の如きは、被害絶無といふ位であるから、若しその移植法が充分に行へたならば、風致的栽培の一として面白いもの、一つであらうと思ふ。此の白竹なるものは、苦竹の一變種であるから、これを考へても、竹の變種の出來ないと云ふことは無いのである。

六、間延の枝は剪定すべし

間延の枝を剪定するといふことは、趣味篇に於て説いた筈であるが、少し缺けた所があるから此所に補ひ返すが、鳳尾竹なり、布袋竹なりを盆栽にすると、新しく生じた竹の小枝は、必らず從來の枝よりも長く、其の葉に至つても、吃度と長大なのは、梅の小枝が新たに生じたものは、眞直であつて、枚葉が大形であるのと同じことであ

る、これは如何にして整齊すべきかと言ふと、若し支へのない限りは剪定鋏を以て、其の尖端を剪除すべきものである。左様にしないと、折角の盆栽もお化になつてしまふから、前篇に述べた通り、小枝を抜き去つた後に生じた小枝は、鋏で剪つてよいのである。如何なる場合にも、最後の完美なるべきを豫定して、其の前よりこれを施行するといふことは不可能で、折角小枝を抜き去つても、尚ほ其の形態に缺くる所があつたなれば、これを補ふが爲めに第二の手入れ法を講ずるのは、事實上から避くべからざることである。

然るに往々にして、お化に類した竹の盆栽が、園藝家や盆栽家の愛玩品の中に發見さるゝのは遺憾の極みである。これは畢竟する所、竹の手入れ法を知らぬからで、知つての上の無性ではあるまいか、兎に角餘り竹の盆栽に對して注意心のないのを、一般盆栽の愛好家に向つて不満足を感じる次第である。

七、堤塘には笹を植ゆべし

予輩は隅田川に沿ふた向島の堤塘の上を歩く度に、市の當局者などいふ人の頭が存外遲鈍であることを思ひ出さずには居られないものである。人も知る通り向島の堤は、向島一帯、寺島、綾瀬の諸部落に對する水害の豫防で、隅田川の汎濫する場合の豫想防備で、此所にはまた多くの櫻樹を植ゑて、古來より實益以外都人士觀賞の場としてゐるが、昔は知らず今日では、此の堤塘上に生じたものは、雜草の外には設備上の關係から、極めて見悪くなつた櫻樹の植ゑられてある以上、他に何物もなく、一朝大水が押し寄せ來つたならば、水の接する所の土壤は、水の爲めに洗はれて、其の全部を破壊しないまでも、必ず其の根底部を取り去らるゝことが、往々にして生ずるのである。

堤塘に於ける設備及び構造などいふ問題に就ては、其れれく深き研究と、方法があ

らうと思ふし、予輩は其の當事者でないから、是等に關する知識が狭いが、而も人文史上に現はれもの、上から考へて見ると、それは決して策の宜しきを得たものといふことは出来ないのである。

歴史の記す所に依れば、古の明君賢士は、多く栽竹の獎勵を爲したもので、特に河川の流域に於ける栽竹は、力を盡して之れを行つたものである。

即ち是れを今日に見れば關西地方に於ける木津の御藪、加茂の御立藪、周防岩國の錦見藪、横山藪などは其の適例で、其の外紀の川沿岸、桂川沿岸、旭川沿岸などには昔より苦竹、淡竹の美林が存在して居る、また大分縣の四大河川には其の上流まで竹の林が繁殖してゐる。

河川の堤塘に竹を栽植することの有益なのは、早くから知られたものと見えて、日本の國史には景行天皇の御宇、河内の狭山の池の堤塘に竹を植ゑしめられた古事が記されてある。近くは我邦の大儒熊澤了介(即ち蕃山先生)が、岡山藩に奉仕せられた際

(明曆二年十二月)郡奉行に達せられた條文に「大川堤竹植可申事」とあつて、それが實行せられたので、今日岡山縣下には河水の流域に、竹の美しい林が澤山にあるのである。

徳川時代の農政者で、一種の崇高な人物である宮澤安貞、佐藤信淵翁の如きも、夙に川堤に竹を仕立てる事の有益なのを説いてゐる。

河川の堤塘に、竹を植ゆることの利益は一二にして、足らないが、今其の利益の一斑を擧ぐれば、

- 一、竹林の繁殖に依り、地盤が土壤と結合固着して容易に崩壊しない事。
 - 二、傾斜の強い所でも、竹の根が固着してゐれば洪水などにも抵抗する力がある事。
- 林學博士本多静六氏が、明治四十三年關東地方に起つた大洪水の時、水害地方を巡視して治水策を研究する傍ら、樹木の洪水に對する強弱の度を比較調査した所、最も洪水に弱くして全然枯死せるもの、中には、小灌木類が多かつたが、見かけより弱い

性質を表はしたのは椎、檜、赤松、樅、杉、櫻などいふ喬木もあつたのである。これを第一級として、次には一時落葉するも再び萌芽して恢復し得るもの、即ち第二級のものには、楓、櫟のやうなものがあつた。第三級の被害の程度中様なもの、内には、柿、木犀、楡などがあつたが、竹類は凡て此の内に屬してゐるのである。

其の外尙ほ詳細の調査報告があつたが、被害程度の概略を知るには、それで澤山であるやうである。即ち此の場合、櫻の木は河川の流域に植ゑても、自然の風致を増すだけで、實用上には何等の効がないといふことが知れる。尤も堤塘に櫻を植ゑて置くと人が其邊を歩むから、堤塘の地盤を堅固にするといふ便利があるが、一方には櫻の根を踏み固めて、木の發育を防げるから何にもならないのである、其處で更に竹を堤塘に植ゑる利益を挙げれば、

三、河水氾濫に依り、上流の沃土を堆積して却て竹を肥すこともある。

四、河岸に繁殖した竹は、伐出して筏とした上に下流に運搬することも容易である。

から便利である。山城の竹林栽植が發達したのも全く地の利を占めてゐるからで、竹林の市場は、淀川の河口である。

斯様に説き來ると、予輩の意は、隅田堤などにも、櫻の代りに竹を植ゑるといふのであらう。春になれば白雲搖曳して、都人士、歡樂の境となるのを、不風流の極みにも、竹藪を作るのかと思ふものがあらうけれども、早まつてはいけな、予輩は決して櫻に代へるに竹を以てして、都會の風致を破壊し、實利一方に偏し走らういふのではない。其の堤塘の如きには、大熊笹、小熊笹、オカメ笹、アイケラ笹、チゴ笹の如きを植ゑて、一方堤塘上に於ける美觀を爲すと共に、他方に於いて地盤の堅固を計るがよいと云ふのである。

斯くしたなれば、夏は雜草が生じ、冬は地面が露出して、上からは霜の爲めに崩れ落ちる虞もなくなるのである。四時緑の色を絶やさず、雪が降つても尙ほ一種の美觀を添ゆるのである。然ういふと又人々が、櫻の根に笹を植ゑると、櫻の發育を妨げる

からいけないといふかも知れないが、笹の根が櫻の發育の妨げる以上に、隅田堤の如きは人が發育を妨げ、地を通した瓦斯管が妨げ、煤煙が妨げてゐるのである。左様に幾らも櫻の木の發育を妨げるものがあるから、笹の根で妨げても構はないといふのではないが、小金井の附近、若しくは玉川上水の堤塘の上に植ゑられた櫻の樹の如きは、隅川堤以上の草藪の中に立派に生育してゐる例もあつて見れば、獨り笹のみが特別の害を與ふるといふことは言はれないのである。

前篇にも擧げた高瀬羽阜氏の庭園の中には随分立派に樹木が生育し、全然櫻の樹を以て作られた丘もあるが、其の邊には口繪に出したやうな大熊笹が、物の見事に繁茂してゐて、而も櫻も立派に花をつける處を見ると、笹のみが獨り櫻に害を與ふるといふことは、斷定せられない議論となるのである。然らば隅田堤の斜面に笹の類を移植することは、一舉兩得の企圖ではないか。予輩は獨り隅田川の流域と云はず、全國の河川に添ふて、それ〴〵竹なり笹なりを植ゆる事、昔時の如くありたいと、今日

の市政家、縣政家、村政家などに深く期待するのである。

八、盆竹及び苗竹の價

盆竹の價と云つた處で、作る人の見込次第で、高くも安くも賣るのであるから、一概に云ふことは出来ない、それに風雅の道を樂しむのに、盆栽の價段のことをいふのはチト道樂過ぎた話であるが、物には凡て價があるもので、初心者には必要であるから、一應此所で置いて置いても苦しくはあるまいと思ふ。前篇にもいふ通り、鳳尾竹、永年竹などの盆栽は四五年経過したもので、一鉢貳圓五十錢位から五圓位までが通り相場になつてゐる。これは竹を卑下する盆栽家などから言はすれば非常な高價である様だけれども、他のものよりも培養が困難であつたり、永年竹を経なければ、盆栽らしい盆栽にならなかつたりする關係から言へば、是等の價段は決して不廉いことではない。苗竹を買ふにしても、

四	金	虎	鳳	業	黑
方	明	斑	鳳	平	
竹	竹	竹	竹	竹	竹
一	一	一	一	一	一
本	本	本	本	本	本
十	十	十	十	十	八
五	錢	錢	二	錢	錢
位	位	位	位	位	位

の金は出さなければならぬのだから、二十本立って居る黒竹の盆栽を購ふに、一圓五六十錢の金を出すのは當然のことである、是等の價段附は初心者に殊に必要で、これらの竹の盆栽なり庭なりを作らうと思ふものには、多少参考になるであらうと思ふ。また竹の盆栽が、追々値の出るのは、我等の信じて疑はぬところであるから、植木屋などは特に澤山作つて置くが好からう。

九、竹に類似の植物

竹でなくて、竹に類してゐる爲めに、竹と名の附いた觀賞植物が二三ある。それは第一が、

- 一、櫻欄竹
で、櫻欄竹は、觀賞植物として、何所でも愛玩されてゐるけれども、それは竹ではない。去りとてまた櫻欄でもない、別科の植物に屬する。次は、
- 二、觀音竹

で、櫻欄竹に似てゐる。何れも清雅なる形態をして、四時綠色を斷たぬから、人が好んで裝飾に用ゐる。此の兩種の價段は十本位三十圓位する、孟宗竹も五本立十二圓位するから此の兩者と略比敵する。

十、盆竹及笹の陳列法

盆栽の陳列は、元來煎茶裝飾の一部であつて、書畫の巻軸や、文房具や、瓶花と同じく一盆若しくは二三盆を配置して其の坐席の風趣を添へたものである。然るに盆栽を愛培するもの、年毎に多きを加へ、煎茶の席以外に陳列の雅會を催すことになつて、獨立した風雅の樂しみになり、煎茶の會と肩を並べると同時に、書畫、骨董の類の會にも肩を並べ、或る場合にはそれが却て盆栽の會の餘情を助くるもの、やうになつて了つた。

此の様に主客の位地が顛倒したのでから、其の陳列法も一變して、單に盆栽のみを以て山野に於ける草木自然の風致を一室の内に現はすやうになつた。

例へば春の野の長閑なる趣きを寫さんとせば、高卓には西湖柳の懸崖もの、下には董、蒲公英などの草物の寄せ植、横卓には直幹若しくは半懸崖もの、別に低き一卓には野木瓜の一盆を置くなど、云つたやうなものである。

紅葉せる直幹の楓樹に、葉落櫟の懸崖もの、草ものには野菊、龍膽、菅などの寄せ植、

更に楓樹の紅葉に對して常緑の眞柏、若しくは松の一盆を配して、床には秋景山水の畫幅を掲げ、盛りもの、瓶花又は其の時候に適するを選び、一室の中、秋風山水の趣きを縮寫するものも亦妙であるとは、斯道の名家清華庵主人が談片の一節である。予輩諸所の盆栽會に臨むに、未だ竹の盆栽を以て其の裝飾に爲し、若しくは山水自然の景を縮圖したものを見たことが無い。勿論竹一色のみを以て、山水自然の景を移すといふことは困難であるけれども、而も竹を多く配して他を少くするといふことは出来ることである。予が本年某富豪の裝飾を命ぜられた時試みた案は、竹林山水の趣きを能かせて、高卓だけは眞柏の懸崖物、下には直幹の二尺に餘る布袋竹、横卓には小熊笹の淺鉢仕立、別に低き一卓には貴船石の水盤を配し、草物には高山植物の一株を配し、床には文晁が墨痕淋漓たる瀑布の大畫幅を懸けたのである。

此の中に種類の異なつてゐるのは、眞柏と深山草とだけで、竹を多く用ゐた所に少なからぬ苦心があつたのである。併し竹は直幹ばかりであり、夏になつて繁る性質の

ものであるから、春や秋の景色を現はすに相應しからぬ。夏か冬かは最も氣節にも合ふから、かゝる場合には竹ばかりの陳列法を試るも一興であらうと思ふ。

それから竹に配する石の事であるが、竹には石つきが悪いといふではないが、元來石のない所を選んで性育してゐるだけに、楓樹、槭樹、檉、眞柏、柳のやうなもの程石付きが宜しくない。が、竹も三四幹立てたものは見劣りがしない、盆栽家の手腕如何に依て、善くも悪くも、形が定まる、其の心して用ゆるが能からう。

附 録

竹笹培養いろは盡し

- い、一番に孟宗竹を植ゑるがよし。
- ろ、露路の竹は柔軟なのがよし。
- は、始めから上手になると思はぬがよし。
- に、西南の地は竹を植ゑるによし。
- は、細き竹は盆栽がよし。
- へ、隔りを程よくするがよし。
- と、年々の竹は皆立ぬがよし。
- ち、地味を選ぶがよし。

り、林地は斜面に作るがよし。
 む、抜き去る筈は發生の前後がよし。
 る、類を別ちて仕立てるがよし。
 を、丘の麓には竹を植ゆるがよし。
 わ、若き竹は盆栽にせぬがよし。
 か、垣根の隈には竹を植えるがよし。
 よ、好き盆栽は四五年を過ぎたるがよし。
 た、竹の盆栽は古るきがよし。
 れ、連年ともに盆竹を仕立てるがよし。
 そ、袖垣の根にはオカメ笹を植ゆるがよし。
 つ、露には盆竹を當てやるがよし。
 ね、根笹は樹立に植込がよし。

な、成るべく親竹は選ぶがよし。
 ら、老竹は時に應じて伐るがよし。
 む、土鼠を竹林に入れぬがよし。
 う、植付は晩春か晩秋がよし。
 め、井戸や泉の邊りには笹を植えるがよし。
 の、野菊を笹に配合するがよし。
 お、鬼羊齒なども笹に配合してよし。
 く、瓦礫を土に交へぬがよし。
 や、柳と竹とは並べ植ゑぬがよし。
 ま、苦竹は竹栽を取る目的とするがよし。
 け、夏入から鉢は日中に曝ぬがよし。
 ふ、踏と笹でも配合がよし。

盆栽園庭

竹笹培養及手入法

終

せ、西洋建物には孟宗竹がよし。
す、好きこそ物の上手になるがよし。

- こ、小柄の竹を自然に培養するがよし。
- え、枝葉の整齊に心がくるがよし。
- て、天然の風致を失はぬがよし。
- あ、蟻を盆栽に上げぬがよし。
- さ、笹の利用を努むるがよし。
- き、伐る時は秋より冬までがよし。
- ゆ、雪には折れぬ要心するがよし。
- め、女竹も庭園の隈に利用するがよし。
- み、緑色の幹色を失はぬがよし。
- し、新規植付けの竹は水を切らぬがよし。
- ひ、秘藏することを忘れぬがよし。
- も、元竹は四五年生のものがよし。

甕のほとりの竹葉は、春を得て熟すとか、階の
 もとの薔薇は、又夏に入りて開くとか今は今
 秋更けて、籬の萩花は林葉の陰に起き臥す草
 薊花をのぶるばかりなり、げにや我宿は、菊賣
 る市にあらねども、四方の門邊に人さわぐ、樂
 しみ數々にまさり草。(謠曲)

大正二年九月廿一日印刷
 大正二年九月二十日發行

著者 有所

著作者

清水橘村

發行者

岩崎鐵次郎

印刷者

中島藤太郎

印刷所

神田印刷所

發兌

東京市神田區
 鍋町二十一番地

大學館

電話本局三〇六七番
 振替東京四五一七番

盆栽庭園
 竹笹培養及手入法

正價金五拾錢

農學博士 小千山繁太郎 先生 文序 閣校 編人
園藝之日主 幹 士 學 農
園藝之日主 幹 士 學 農

四季 菊花栽培秘訣 價五十錢

春菊栽培法 ● 夏菊栽培法 ● 秋菊栽培法
第一實驗說 ● 第二實驗說 ● 第三實驗說 ● 第四實驗說 ● 第五實驗說

● 寒菊栽培法 ● 菊栽培問答

以上に就て春菊の種類 ● 夏菊の種類 ● 秋菊の種類 ● 大菊及中菊栽培法 ● 各種菊栽培 ● 植付法 ● 帚作り法 ● 懸崖風栽培 ● 篠作りに限る ● 蕾及開花期 ● 花壽 ● 開花前に良否を知る法 ● 根分の時期 ● 芽の良否鑑別法 ● 菊の芽管理法 ● 摘芽の方法 ● 假植の是非 ● 定植 ● 定植後の肥料 ● 矮生定植法 ● 花のつけ方 ● 花の繁殖法 ● 花の觀賞法 ● 種播き法 ● 新種作出法 ● 施肥法 ● 肥料の種類 ● 花肥とする肥料 ● 培養用土 ● 播種用土 ● 土の盛り方 ● 乾土の作り方 ● 朝夕の灌水法 ● 支柱の立て方 ● 花壇の作り方 ● 花壇の雨障子と作り方 ● 花壇植付期 ● 盆栽菊培養法 ● 畑作りの菊 ● 鉢植法 ● 鉢と花輪 ● 挿木及接木法 ● 完全なる接木法 ● 砧木の撰擇 ● 接木後の注意 ● 害虫豫防法と驅除法 ● 冬期の灌水 ● 冬期の管理 ● 霜除の方法 ● 落花後の管理 ● 再咲を避けよ ● 菊と夕日の關係 ● 苦心を要する點 ● 根は切るべきか ● 土は落すべきか ● 霖雨中の管理 ● 催苔法等其他一切詳述せり

大正 本位 園動 協一 會等 々伯 頭會 長士 奈川 縣農 學事 試驗 場長 園藝 之日 主本 幹

大正 本位 園動 協一 會等 々伯 頭會 長士 奈川 縣農 學事 試驗 場長 園藝 之日 主本 幹

價五十錢 「目次 大要」

第一實驗談 ● 千葉式養菊法 ● 養菊十二ヶ月間の管理法

第二實驗談 ● 中山式養菊法 ● 中菊培養法 ● 菊の養生法

第三實驗談 ● 深井式養菊法 ● 大菊培養法

第四實驗談 ● 永野式養菊法 ● 十二ヶ月間中菊の管理法

第五實驗談 ● 別法 ● 挿芽法 ● 下種法 ● 別法 ● 驅除法 ● 接芽法

第六實驗談 ● 加州に於ける養菊法 (千葉式養菊法) ● 附養菊問答錄 ● 夏菊栽培可否 ● 夏菊の管理容易なる事 ● 懸崖風の盆栽仕立方を問ふ

第七實驗談 ● 各種養菊問答錄 ● 歐米各國に流行する菊の種類 ● 合衆國加州に流行する大菊の種類

第八實驗談 ● 秋菊を夏菊に變化せしむる秘訣 ● 毎年八月下旬に菊花を開花せしむる秘訣 ● 久保田喜右衛門氏の養菊法 ● 古代の菊花銘 ● 現代の菊花銘

農學士 後藤彌一先生著

和洋草花培養法

正價四拾錢

郵稅六錢

草花培養の秘訣網羅

美花を開き好果を結ばしめんには草木の性を研究し之に適應する方法を以て培養せざる可からず、況んや人工媒助法を用いて、漸次之が改良をなし異花珍種を得んとするに於いてをや。本書はこの希望に副はんが爲めに最も簡易にして好成绩を得る目的を以て、草花小灌木の種類二百三十餘種を春夏秋冬の四季に分類し花壇盆栽用の土壤、肥料の種類分量季節繁殖の種類として播種・根分・擲木・壓倒・接木等必要缺く可からざる方法を草花の一種類毎に斟酌適應する様極めて親切周到に説述せり

和洋草花説明圖壹百五個挿入

農學士 上賀正君著

和洋草花變咲培養法

正價五十錢

郵稅六錢

木版說明圖入

園藝家必携の珍書

菊●朝顔●薔薇●牡丹●芍藥●百合●櫻草●花菖蒲●ダリア
 ●バイオレット等を始め和洋草花の有名なる物に就きて變咲培養の秘訣を傳授するに叮嚀親切を極む
 生物の變化●植物の變化●變咲の意義●花粉の交雜●花粉交雜に由る變化●人工媒助法●種子と變性●變性種子貯藏法●變性種子の播種法●變性種子の移植法●變咲培養と接枝術●變咲繁殖と挿木法●變咲培養の要點●主要草花變咲培養法●一般草花變咲培養法の綱目を擧げ更に數百項に分ちて細叙す

趣味と實益の一舉兩得

盆 栽 研 究 會 編

才 托 及 蘭 培 養 法

正價五十錢

郵稅六錢

斯 道 大 家 實 驗 談

萬年青培養の著書は絶無也

上編萬年青培養法

益裁としての萬年青

●害虫驅除 ●嫩芽の截取 ●實の採集 ●寒中の管理
●屈曲變形法 ●媒助變形法等一切の必要條項を擧げて

一月り十二月に到る一年間の培養法に就

三種の實驗談に基いて詳 萬年青の種類

數十種を擧げ葉形の稱呼 ●葉文斑條の稱呼 ●葉面
●地の稱呼 ●花の性質 ●實の種類及實生 ●

根の變化 ●優等品の産地をも細述せり

下編蘭培養法 灌水 ●肥料 ●乾濕 ●花期の
管理 ●分種等の細目に就き

蘭培養は至難を以て有名也

一月り十二月に到る四季の培養法を二種
の實驗談に基きて 蘭花の種類數十種を
擧げて各性質名稱培養の方法を説明す

苦 心 經 營 の 珍 書

農學士 井上正賀君著

木版説明圖入

變 咲 薔 薇 培 養 秘 訣

正價五十錢
郵稅六錢

目 次 大 要

- 四季の花薔薇
- 薔薇の特色
- 薔薇の芳香
- 薔薇の生理
- 薔薇の種類
- 薔薇と土質
- 薔薇と燠炭
- 薔薇と肥料
- 薔薇變咲と施肥法
- 人工媒助法
- 實生養成法
- 薔薇接木法
- 薔薇芽接法
- 薔薇の伸木法と分條法
- 薔薇の移植法
- 薔薇變咲培養法
- 薔薇名花培養法
- 變咲培養と温室

農學士井上正賀君著

盆栽庭園松培養及入手法

正價五十錢

郵稅六錢

—(説明圖二十八個挿入)—

- 總説 ●松と海岸●松と國民性●山野の松と盆栽の松●松の性狀 ●松の生理 ●葉の作用●同化作用と日光●水分と温度●水分發散作用●葉の作用●葉の生育と境遇●根の作用●葉及莖と根
- 松の種類 ●赤松●黒松●姫小松●五葉松●這松●朝鮮松●外國松 ●松と土質 ●盆栽松と土質●好適の配合土
- 松と燻炭 ●燻炭の製法 ●松と肥料 ●無臭肥料●智利硝石●硫酸アモニア●硝酸加里●過磷酸石灰●加里質肥料●灰 ●施肥の方法 ●盆栽に施す分量 ●庭園の松の施肥法 ●松の植込み方 ●松の座地●松と風との關係●松の移植方法●大根を切りたること●移植と枝葉の剪除●鉢植方法●鉢の種類 ●松の仕立
- 方 ●松と接木法 ●松の實蒔 ●松の手入法 ●根上り松の仕立方 ●松の盆栽と苔 ●苔の種類●苔を石に附ける法 ●川石に苔を附ける法 ●松と石 ●松と景臺 ●衛生と松 ●紀念樹と松 ●松の腐朽を防ぐ方法 ●松茸の養成 ●松茸生育の理 ●松茸人工培養法

農學士井上正賀君著

シヤボテン蘇鐵培養法

正價五十錢
郵稅六錢

世間唯一の手引

- シヤボテンの種類
- シヤボテンの性狀
- シヤボテンの生理
- 何んな土質がよきか
- どんな肥料がよきか
- 繁殖の方法
- 變り物養成法
- 如何にして植付くるか
- 四季の培養方法
- シヤボテン温室
- シヤボテン培養實驗談
- 優等種培養實驗談
- 蘇鐵の性狀
- 蘇鐵の生理
- 蘇鐵の土質がよきか
- 蘇鐵の肥料がよきか
- 如何にして繁殖するか
- 如何にして繁殖するか
- 移植は如何にすべきか
- 蘇鐵四季培養法
- 蘇鐵培養實驗談

斯道實驗家の苦心談

農學士 井上正賀君著

木版説明圖入

觀花食用百合培養法

正價 金五拾錢
郵税金 六錢

●總說 ●百合の種類 ●百合の生理 ●百合と氣候土質
 ●燻炭の説明 ●百合と燻炭 ●百合の肥料 ●施肥の方
 法と時期と分量 ●百合の繁殖 ●種球の撰び方 ●百合
 の連作と植付期 ●百合の植付方法 ●新種育成法 ●百
 合の害虫驅除 ●百合の病害 ●收穫貯藏荷作 ●販賣と
 收支計算標題の下に數百節に分類して培養の方法一切
 を網羅せり

農學士 井上正賀君著

和洋草花と肥料

附盆栽の肥料

正價金五拾錢
郵税金六錢

方今和洋草花の培養日を逐ふて盛なりと雖も培養の根本となる可き肥料の知識を缺如するが爲めに草花の改良を見る事能はざるは遺憾の次第なりとす、著者夙に肥料専門の學を修めたる上に草花の肥料に就きては多年の研究と實驗を積みたるに依り此に本書を著して三十餘種の肥料と草花の關係應用を詳説し草花栽培家の從來曾て試みざる燻炭肥料に就きて殊に精細なる叙述を試みたり、されば本書を一讀してこれを應用すれば必ずや草花改良に數段の進歩を來さんこと疑なし。實に園藝家の爲めに福音たる珍書也。

●植物生育の理 ●花の生理 ●花と肥料 ●草花肥料の種類 ●燻炭肥料の事 ●草花と燻炭肥料 ●施肥の方法と期節 ●肥料分解の事 ●本邦草花肥料
 ●朝靨 ●牡丹 ●薔薇 ●芍薬 ●水仙 ●千日紅 ●丈菊 ●美人草 ●
 ●麝香撫子 ●秋海棠 ●紫苑 ●秋蘭 ●百合 ●桔梗 ●金盞花 ●櫻草 ●紫陽花 ●翠菊 ●福壽草 ●罌粟 ●松葉牡丹 ●矢車
 ●草 ●撫子 ●燕子花 ●萬年青 ●女脚花 ●蝶斗菜 ●萩 ●花菖蒲
 ●西洋草花肥料 ●グラス ●ジャコ ●パイオレット ●アネモネ ●スイートピー ●モンテブレシヤ ●ジカ
 ●チュウベロ ●チンネリア ●トリニヤ ●シエレンヤム ●サネリヤ ●フレンジヤ ●フレトン ●プリムラ ●アコニカ
 ●テルヒ ●ニキム ●ラナンキ ●トラス ●チュウリツ ●レセダ ●コスモ ●ヒブリダ ●ロベリア ●リナリア ●パ
 ●ルトニヤ ●グロキシヤ

●盆栽の生理と肥料

農學士 野村安太郎先生著 (草花説明木版五十五圖挿入)

西洋草花栽培法

正價廿五錢
郵税四錢

近時園藝趣味の普及に依り西洋草花の輸入日に多く内地の栽培愈々盛なり本書は古くより輸入せられたる者の外最近輸入に係るものを網羅し同好者が参考書たるを期せり

苗床 ①温床 ②冷床 ③早咲法 ④唐室 ⑤箱室 ⑥人工媒助法 ⑦移植法 ⑧春の花 ⑨夏の花 ⑩秋の花 ⑪冬の花

あ ①く ②ら ③め ④い ⑤を ⑥れ ⑦つ ⑧こ ⑨う ⑩ら ⑪す ⑫て ⑬る ⑭び ⑮に ⑯ゆ ⑰い ⑱む ⑲あ ⑳れ ㉑も ㉒ん ㉓も ㉔ゆ ㉕い ㉖む ㉗夏 ㉘の ㉙花 ㉚す ㉛ば ㉜ら ㉝む ㉞れ ㉟せ ㊱だ ㊲ば ㊳す ㊴れ ㊵ん ㊶う ㊷な ㊸た ㊹り ㊺や ㊻さ ㊼る ㊽ひ ㊾や ㊿す ㊽も ㊾す ㊿ば ㊽と ㊾に ㊿や ㊽へ ㊾り ㊿あ ㊽ん ㊾ら ㊿ん ㊽じ ㊾び ㊿て ㊽ん ㊾す ㊿だ ㊽り ㊿や ㊽す ㊾ぬ ㊿い ㊾さ ㊿び ㊽す ㊾う ㊿い ㊾な ㊽ん ㊾ふ ㊿ら ㊽わ ㊾い ㊿に ㊽か ㊾る ㊿こ ㊽ら ㊾や ㊽な ㊿す ㊾す ㊿ち ㊽ゆ ㊾む ㊿か ㊾ね ㊽し ㊾ん ㊽ふ ㊿ろ ㊽つ ㊾く ㊽す ㊾ら ㊽も ㊾ん ㊽ち ㊾ま ㊽ん ㊾も ㊽い ㊾て ㊾は ㊽い ㊾び ㊾な ㊾ふ ㊾れ ㊾さ ㊾ん ㊾か ㊾ん ㊾な ㊾ぐ ㊾ら ㊾じ ㊾を ㊾す ㊾づ ㊾き ㊾た ㊾り ㊾す ㊾に ㊾い ㊾り ㊾す ㊾き ㊾ん ㊾ち ㊾た ㊾り ㊾や ㊾さ ㊾り ㊾や ㊾い ㊾ほ ㊾く ㊾し ㊾や ㊾い ㊾べ ㊾り ㊾す ㊾ら ㊾秋 ㊾の ㊾花 ㊾こ ㊾る ㊾ご ㊾こ ㊾り ㊾す ㊾べ ㊾ち ㊾ゆ ㊾に ㊾や ㊾あ ㊾す ㊾た ㊾い ㊾べ ㊾こ ㊾に ㊾や ㊾い ㊾ば ㊾に ㊾ゆ ㊾ら ㊾お ㊾き ㊾さ ㊾り ㊾す ㊾冬 ㊾の ㊾花 ㊾な ㊾い ㊾し ㊾つ ㊾さ ㊾す ㊾百 ㊾數 ㊾種 ㊾の ㊾花 ㊾卉 ㊾に ㊾就 ㊾き ㊾一 ㊾々 ㊾肥 ㊾料 ㊾灌 ㊾水 ㊾種 ㊾子 ㊾採 ㊾收 ㊾保 ㊾存 ㊾變 ㊾種 ㊾害 ㊾虫 ㊾用 ㊾土 ㊾等 ㊾栽 ㊾培 ㊾一 ㊾切 ㊾の ㊾法 ㊾を ㊾詳 ㊾説 ㊾す

編會究研アリーダ

法倍栽アリーダ 實驗

價四拾五錢

郵税四錢

ダリーリアの原産地 ●日本に於けるダリーリア

●ダリーリアの種類 ●シゲルゲルダリーリア種 ●シゲルゲルカクタスダリーリア種 ●アネモネフラワードダリーリア種 ●ボンボンダリーリア種 ●シヨードダリーリア種 ●スターダリーリア種 ●ヒオニイフラワードダリーリア種 ●トムサムダリーリア種 ●スターダリーリア種 ●グリーン種 ●最近の良種 ●就 五大家の實驗談を特殊の項目に分

●第一實驗說 ●如何にして植付 ●適する肥料 ●球根貯藏 ●支柱の設備 ●蓄積 ●挿木 ●分球法 ●實生法 ●接木 ●三角接合 ●斜接 ●花壇鉢植 ●裝飾 ●病害豫防

●第二實驗說 ●栽培 ●植付 ●播實 ●分球 ●挿木 ●接木 ●氣候 ●土壌 ●肥料 ●花壇貯藏 ●壇作法 ●花壇栽培 ●灌水 ●施肥 ●刈込 ●支柱 ●摘蕾 ●害虫驅除 ●球根貯藏

●第三實驗說 ●畝の間隔 ●球根の植込 ●植込前の土 ●肥料 ●灌水 ●長形の支柱 ●種子保存 ●實生 ●蓄積 ●挿木 ●接穂 ●外し根 ●二段蓄積 ●古根除去 ●買蒔 ●球根保存 ●害虫驅除 ●氣候 ●水揚 ●品評會用の培養法 ●床作り ●床に適する場所 ●支柱の準備 ●摘蕾 ●切枝 ●ダリーリア裝飾法

●第四實驗說 ●植付 ●支主の設備 ●施肥 ●植込 ●球根保存 ●蓄積 ●實生 ●挿木 ●分球 ●接木 ●鉢植 ●刈込後の管理 ●土壌の攪拌 ●灌水 ●施肥 ●ダリーリアの裝飾

●第五實驗說 ●植付 ●摘芽 ●施肥 ●挿木 ●挿木の管理 ●實生 ●刈込 ●水揚げ ●害虫驅除 ●球根貯藏 ●灌水 ●支柱 ●蓄積 ●肥料 ●日本に流行するダリーリアの種類 ●カクタスダリーリア ●デコラチーフダリーリア ●ヒオニイダリーリア ●シヨードダリーリア ●コラレットダリーリア

栽培問答 ●植付 ●肥料 ●球根貯藏 ●蓄積 ●支柱 ●灌水 ●害虫驅除

花壇設計家 萬代虎藏君著 (七色刷四季花壇圖七頁挿入)

和四季の花壇自在

附花壇向花卉の撰擇 開花期及栽培法

定價金六十錢

郵稅六錢

目次大要

緒論 ●花壇の沿革 ●花壇の種類 ●和風花壇 ●寄植花壇 ●規則植花壇 ●洋風
 花壇 ●整形式 ●毛氈花壇 ●浮出花壇 ●折衷花壇 ●不整形式 ●空中花壇 ●水
 草花壇 ●緑取花壇 ●リボン花壇 ●不規則花壇 ●飛置花壇 ●寄植花壇 ●四季
 夏花壇 ●冬花壇 ●永久花壇 ●各種花壇の設計及築造 ●花壇と建築物との関係 ●庭園
 と花壇との関係 ●花壇の位置 ●花壇の形状 ●花壇の模倣 (主に毛氈花壇) ●花壇路 ●土壇 ●整地 ●自然園 ●肥
 の飛置花壇 ●日蔭地 ●中央木 ●観葉植物 ●花壇用花卉の栽培法 ●秋季播種法 ●秋
 移植 ●防害 ●春の播種 ●肥料 ●鉢仕立 ●用土 ●秋播種 ●春季播種 ●花壇用花卉の
 秋庭 ●芝草 ●栽培法 ●花菊 ●大菊 ●中菊 ●小菊 ●外部に蕃殖する花卉 ●
 ●庭及芝草 ●定植 ●調製 ●土 ●摘心 ●支柱 ●病害 ●實生 ●花壇用花卉 ●梅 ●分根 ●分床
 ●移植 ●挿芽 ●定植 ●調製 ●土 ●摘心 ●支柱 ●病害 ●實生 ●花壇用花卉 ●梅 ●分根 ●分床
 ●梅の養成 ●福壽草 ●木柵内に養成すべき花卉 ●花壇の管理 ●定植 ●花壇の流通する理由 ●其他花壇一切詳説
 用花卉の開花期 (二月より十二月迄) ●花壇の管理 ●定植 ●花壇の流通する理由 ●其他花壇一切詳説
 ●撰種及採種上の注意 ●垣代りの整枝果樹 ●花壇の流行する理由 ●其他花壇一切詳説

農學士 井上正賀君 著
結實法 果樹盆栽法

郵稅六錢

定價五十錢

綠日で見ると小さき金柑の盆栽でさへもその黄なる果の枝に着ける
 可憐の様は人の注意を引かずには居られないもしも豊大なる紅をさ
 せる桃や林檎や黄色なる「オレンジ」が狭まき鉢に植へられたる小
 さき樹の枝に垂下しておつたならばどうであらうか朝に晩にその
 果を口にはするけれどもそれが樹の枝に結べる様をあまり見るこ
 の少ない都人士には一つの珍奇なものに感ぜらるゝであらう盆栽
 に趣味を持つ持たぬに拘はらず一つ試みて見給へ必らずそれから
 思はぬ趣味と實益を見出さるゝに違ひがない本書掲載の重なる
 盆栽は ●梅 ●杏 ●櫻桃 ●棗 ●桃 ●李 ●郁梅 ●養珊瑚 ●柘榴 ●温梓
 ●枇杷 ●柿 ●苹果 ●柑橘 ●梨 ●葡萄 ●無花果 ●須具利 ●栗 ●胡桃
 等にして著書自らの経験に基き詳細綿密に説述したり

- ▲盆裁と果實
 ▲植物結實の理
 ▲花と結實作用
 ▲結實作用と土質
 ▲結實作用と燻炭
 ▲結實作用と肥料
 ▲施肥の方法と時期
- ▲盆栽と果實
 ▲結實作用と接木法
 ▲果樹鉢植法
 ▲盆栽剪定法
 ▲各種盆栽結實法
 ▲果樹盆栽と温室
 ▲果樹盆栽と人工媒助法
 ▲果樹盆栽と児童

▲木版説明圖二十三個挿入

子爵 伊東己代治君題字
香樹園主人 江原春夢共編

(寫真版五十二葉挿入)

名家盆栽奇石逸品集

價五十錢
郵稅六錢

本書は編者が諸名家を歴訪し其愛藏の逸品を撮影したるものを蒐集せり加ふるに各多年の経験になれる培養及配置の方法に就いての苦心談をも掲載したれば彼の徒に机上の研究になれる坊間の書とは全くその撰を異にせり。掲載寫真版左の如し

● 杉(小宮三保松氏藏) ● 巖石松(大隈伯爵藏) ● 小品盆栽(大隈令夫人藏) ● 富(櫻板倉子爵藏) ● 柏(山本碧清氏藏) ● 富士按(益田孝氏藏) ● 桑(平林半江氏藏) ● 櫻(萩原彌吉氏藏) ● 石榴(常盤津林氏藏) ● 巖石(服部八右衛門氏藏) ● 桑(平林半江氏藏) ● 櫻(萩原彌吉氏藏) ● 石榴(常盤津林氏藏) ● 紅葉葛(大隈伯爵藏) ● 野梅(長井利右衛門氏藏) ● 小葉楓(松澤蒼龍氏藏) ● 白檀(鈴木雪友園藏) ● 杜松(大隈伯爵藏) ● 根洗石付の杉(西村三三氏藏) ● 黒松(平岩龍虎氏藏) ● 眞柏(香樹園藏) ● 松翠軒氏藏) ● 眞柏(木村源兵衛氏藏) ● 姫石榴(喜谷竹陰氏藏) ● 野梅(高橋新吉氏藏) ● 赤松(松澤樹(栗林松壽氏藏) ● 針樅(鈴木政右衛門氏藏) ● 檜棗果(奥貫雲泉氏藏) ● 野梅(高橋新吉氏藏) ● 赤松(松澤村覺三氏藏) ● 眞柏(大畑多村氏藏) ● 柏(高木利八氏藏) ● 杜松(伊藤博邦公藏) ● 奇石(柴田伊吉氏藏) ● 赤松(永富雄吉氏藏) ● 玉眞蘭と奇石(吉田丹左衛門氏藏) ● 刷と奇石(下村壽抱氏藏) ● 奇石(西村覺三氏藏) ● 眞柏(大畑多村氏藏) ● 石榴(岡田市太郎氏藏) ● ぶな(香園藏) ● 姫石榴(神田樂天氏藏) ● 奇石(渡邊千秋伯藏) ● 石榴と奇石(岡田市太郎氏藏) ● ぶな(香園藏) ● 姫石榴(神田樂天氏藏) ● 奇石(益裁陳列(加藤樹峽氏藏) ● 盆裁陳列第一席(百草園) ● 盆裁陳列第二席(百草園) ● 盆裁陳列第一登(清大園) ● 盆裁陳列第二席(清大園) ● 盆栽陳列第一席(千樹園) ● 盆栽陳列第二席(千樹園)

農學士 後藤彌一先生著 (盆栽寫真版及本版三十八個挿入)

家庭盆栽培養法

正價卅五錢
郵稅六錢

實生の仕立方 ● 山野の採集 ● 採集の方法 ● 移植 ● 鉢より本鉢に移植の時期 ● 樹を鉢に植る位 ● 採集の時期 ● 樹勢の撰擇 ● 鉢と樹の釣合 ● 水抜穴の注意 ● 鉢植土の盛方 ● 苔を生ずる法 ● 盆栽と苔 ● 苔の種類 ● 苔を生せ ● 盆栽の置 ● 鉢植土の盛方 ● 苔を生ずる法 ● 盆栽と苔 ● 苔の種類 ● 苔を生せ ● 盆栽の手入 ● 春の手入 ● 夏の手入 ● 害虫豫防及驅除法 ● 鐵砲虫 ● 尺蠖虫 ● 芽切 ● 秋の手入 ● 冬の手入 ● 害虫豫防及驅除法 ● 鐵砲虫 ● 尺蠖虫 ● 芽切 ● 栽土 ● 用土の種類 ● 眞土の赤土 ● 野土 ● 腐 ● 肥料 ● 肥料の種類 ● 盆栽肥料の製法 ● 植土 ● 其他の用土 ● 用土篩過の効能 ● 肥料 ● 肥料の種類 ● 盆栽肥料の製法 ● 盆栽と石 ● 盆栽用の水 ● 實蒔法 ● 摺木法 ● 壓條法 ● 分株法 ● 接木法 ● 接穂 ● 砧木 ● 接木の期節 ● 接木用具 ● 砧接法 ● 袋接法 ● 鞍接法 ● 舌接法 ● 丁字形芽接法 ● 挿接法 ● 砧木 ● 接木の期節 ● 接木用具 ● 砧接法 ● 袋接法 ● 鞍接法 ● 舌接法 ● 接法 ● 剥皮接法 ● 上字形芽接法 ● 腹接法 ● 十字形芽接法 ● 合接法 ● 根接法 ● 寄接法 ● 芽接法 ● 紅● 櫻 ● 柳 ● 梅 ● 山茶花 ● 辛夷 ● 木通 ● 梨 ● 榊 ● 銀杏 ● 寒竹 ● 櫻 ● 黄楊 ● 百日紅 ● 藤 ● 躑躅 ● 山茶 ● 石楠 ● 薔薇 ● 沙羅 ● 雙樹 ● 梧桐 ● 柘榴 ● 黄楊 ● 山桑 ● 花黄楊 ● 石斛 ● 春蘭 ● 水柏 ● 蓮 ● 睡蓮 ● 蕁菜 ● 葱 ● 水葵 ● 驚草 ● 常夏 ● 菱 ● 燈心草 ● 佛甲草 ● 稗 ● 岩路 ● 石長生 ● 鐵齒朶 ● 茶蘭 ● 石菖 ● 萬年青

農學士 野村安太郎先生著 (盆栽陳列寫眞 本版説明圖入)

盆栽植物採集及培養法

價廿五錢 郵稅四錢

坊間に流布する盆栽培養の書籍取て少なしと謂ふ可からざるも、其の根本たる植物は何れより採集するやを説きしもの殆んどこれなし、著者頗る遺憾とし數年間の苦心に依り實生物を成育し、櫻木を肥培するの方法即ち盆栽として觀賞し得らるゝに至るまでの方法手段悉く網羅し詳説せられたる無比の珍書なり 目次の大要左の如し。

盆栽植物 ●盆栽植物の要素 ●發育の素直なる事 ●根張の強盛 ●盆栽用の樹木 ●實生物の種類 ●柯枝の數多ある事 ●古色を帶る事 ●盆栽用の樹木 ●實生物

採集法 ●實生物の撰擇 ●實生物の樹容 ●實生物培養法 ●實生物の植付 ●植付の土 ●實生物培養鉢

實生物採集の場所 ●實生物と土鉢との關係 ●土鉢に植附ける法 ●實生物花壇培養法 ●實時培養法 ●榎 ●榉 ●榆 ●楓 ●沙羅双樹 ●榛 ●落葉松 ●山桑 ●栗 ●柳 ●黃檳 ●槻 ●かなしで ●曾根 ●椴 ●山日紅 ●いばた ●檜 ●紫金牛 ●梅 ●梨 ●櫻 ●桃 ●李 ●花黃楊 ●藤 ●皐月 ●木瓜 ●石楠花 ●柘榴 ●百日紅 ●葦 ●路 ●常夏 ●秋海棠 ●萬年青 ●佛甲草 ●蘭 ●石菖

●實生物と土鉢との關係 ●土鉢に植附ける法 ●實生物花壇培養法 ●實時培養法 ●榎 ●榉 ●榆 ●楓 ●沙羅双樹 ●榛 ●落葉松 ●山桑 ●栗 ●柳 ●黃檳 ●槻 ●かなしで ●曾根 ●椴 ●山日紅 ●いばた ●檜 ●紫金牛 ●梅 ●梨 ●櫻 ●桃 ●李 ●花黃楊 ●藤 ●皐月 ●木瓜 ●石楠花 ●柘榴 ●百日紅 ●葦 ●路 ●常夏 ●秋海棠 ●萬年青 ●佛甲草 ●蘭 ●石菖

農學士 後藤彌一先生著

家庭園藝 盆栽手入れ法

正價三十錢 郵稅四錢

著名なる草木花卉數百種に就いて一月より十二月に到る毎月の栽培法に分類し各盆栽毎に灌水の注意 ●害蟲の驅除 ●移植 ●春蒔 ●根分木 ●播種 ●植付 ●鉢植 ●日除 ●箱室 ●温室の準備 ●霜除 ●施肥 ●接座右必携の珍本たり末尾に「手入一覽表」の附録あり

- | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 梅 | 蘭 | 櫻 | 萬 | 佛手 | 柿 | 梅 |
| 水仙 | 海棠 | 楓 | 菊 | 百日紅 | 山木 | 山茶花 |
| 福壽草 | 蘇鐵 | 竹 | 桃 | 梧 | 李 | 芭蕉 |
| 落葉松 | 落葉松 | 落葉松 | 落葉松 | 落葉松 | 落葉松 | 落葉松 |
| 木 | 木 | 木 | 木 | 木 | 木 | 木 |

山崎廣次郎君著

實驗小鳥捕獲及飼用法

定價五十錢
郵稅六錢

本書の特色

●空理空論を避けて實地の應用を旨とせること ●著者自身有名なる愛禽家にして記述凡て著者半生の苦心と實験に基きこと ●小鳥の種類を悉く網羅せること ●各種に就て個々の方法を遺漏なく詳記せること ●文章平易にして何人も一讀して應用秘訣を知悉し得ること ●娛樂と實益の兩點に鑑みて一方に偏せざること ●質疑者に對して著者一々その解答の責任を負ふこと等なり

撰擇法

●巨白鳥 ●鶯 ●駒鳥 ●雲雀 ●カナリヤ ●四十雀 ●山雀 ●小雀其他數十種の雌雄の區別 ●春秋の何れの季節に捕獲したる鳥を擇ぶ可きか ●渡期の何れの時期に渡たる鳥を擇ぶ可きか ●摺餌の調合法 ●小鳥を餌就か

飼育法

●鳥籠 ●飼桶 ●餌 ●摺餌 ●就くる方法 ●娛樂に供する鳥と罔に供する鳥との飼育法 ●差 ●摺餌 ●娛樂に供するもの ●飼育法 ●罔に供するもの ●飼育法(込め方) ●鳥の羽替 ●鳥の健康に對する注意

捕獲法

●網を用ひて捕獲する法 ●罔を用ひて捕獲する法 ●罔を用ひずして捕獲する法 ●竊を以て捕獲する法 ●篋を以て捕獲する法 ●高篋を以て捕獲する法 ●千本竊を以て捕獲する法等細述せり

農學博士鈴木梅太郎君序
宮下正男君著

藥用植物栽培及利用法

定價金五十五錢
郵稅金六錢

藥用植物の如何一切の解説を與へ、且つ其性質狀なるものか、之が藥用上の性質狀

態之に藥効、其用法、用量を明にし更に農家の副業收

利を見る可き種類に就葉莖部、果實部、花蕾部、

根部、全部の五綱目に分ちて ●人參 ●生薑 ●黃連 ●大黃 ●龍膽 ●

リヌ ●忍冬 ●藥用泊芙蘭 ●除虫菊 ●罌粟 ●オレイフ ●ホツブ ●亞麻 ●たうごま ●

●茴香 ●樟 ●カミツレ ●枸杞 ●烏瓜 ●甘草 ●木通 ●麥角等 ●其他百七十二種の栽培法及製法について説明圖二十九個を挿入し平易なる文字を以て詳述せる珍書なり

著生先郎一東田原 士學農

法培栽木草用藥

錢四稅郵 錢十二價正

本書は救急療法の一端に供せんか爲め藥用植物の栽培及採收法を叙述せるものにして且つ又た藥用以外食料として觀賞植物として適切なるもの、栽培法をも記せり本書は採收者の便に供んか爲め各植物ごとに形狀開花の時期、結實の状態、肥料、播種、移種等より藥劑としての用法分量等も掲げ且つ實物に依りて寫したる圖を挿入せり肺病奇藥田ウコギ草●●胃痛妙藥白屈菜●●瘰癧其他結核病良藥金線草を始めとして人參、薄荷、泊夫蘭、じきたりす、亞麻、せんぶり、さんきらい、かみつれ等百五十餘種に就て平易詳細に記述せる珍書なり。

350
110



350

110

終

